

観峰館の臨書作品（2） — 《崔敬邕墓誌銘》を中心に —

【観峰館オンライン講座】第8回

根來 孝明（観峰館 嘱託研究員） 2021/07/13

はじめに 講座の流れ

はじめに

《崔敬邕墓誌銘》について

李瑞清（1867～1920）の臨書作品

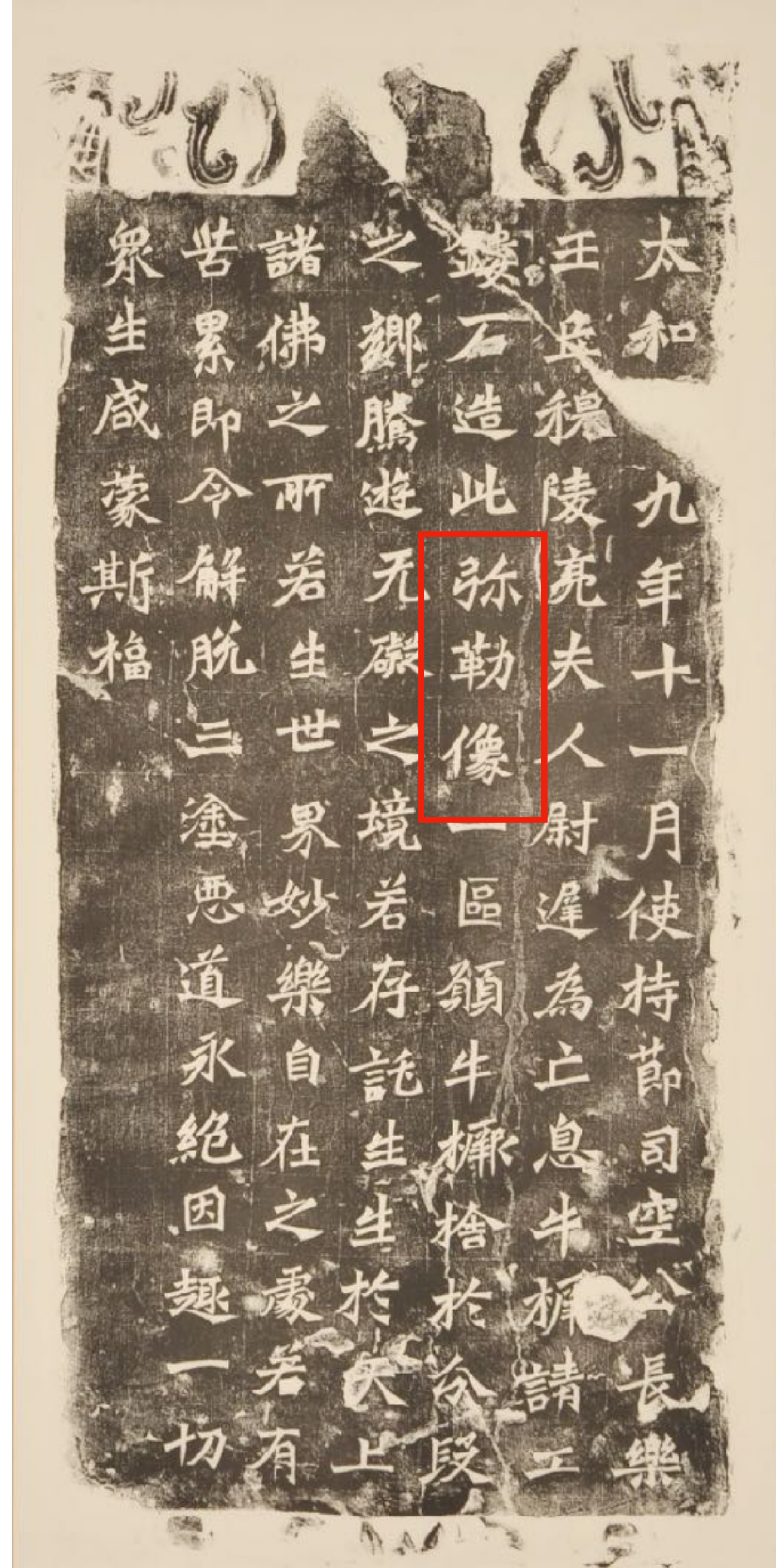
書風の検討―選択と目的―

おわりに



主な図版※一部修正を加えています

- ・北魏刻石の例。
- ・嶮勁（けんけい＝けわしく強い（かたい）さま）
- ・線が直線的
- ・起筆やハライが太い
- ・点画が尖っている



《牛欄造像記》
北魏 太和19年（495）刻
紙本墨拓、79.4×37.7cm、
觀峰館蔵

綿哉遐胄帝炎之緒爰歷姬初
祖唯尚父邁周日漢榮光繼武
日德傳輝儒賢代舉於穆馭考
誕質含靈秉仁岳峻動智淵明
育善以和將幹以貞響發邦丘
翼起槐庭

魏志石中此為第一兼鄭文公孟敬訓之妙
己卯三月上巳后呂日雨宿寫驚世此圖興
清道人時瑞清書滬上

李瑞清（1867～1920）
《楷書臨崔敬邕墓誌銘軸》
中華民國4年（1915）
紙本墨書、135.1×65.9cm、
觀峰館藏



鄭道昭 (?~516)

《鄭義下碑》

北魏 永平4年 (511)

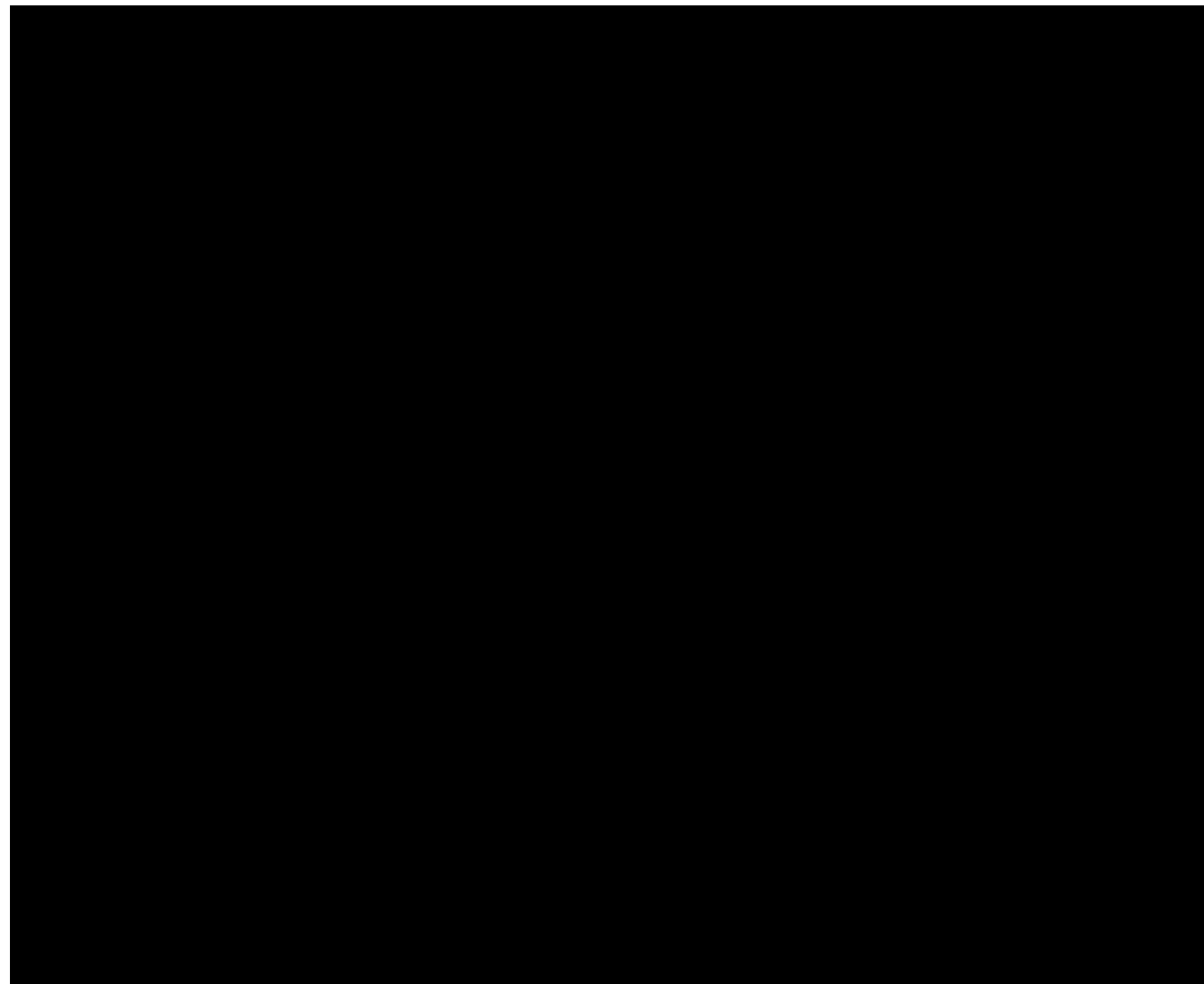
紙本墨拓、

33.7×17.9×3.2cm、

觀峰館藏

過剰に震える線で書く＝「鋸体」

岩肌に刻まれ風化した文字を想起させるスタイル



《崔敬邕墓誌銘》



李瑞清



《鄭羲下碑》

※ 「鋸体」は手本の「再現」ではない

白運

碑版與蘭札書文皆有
兩體南碑傳者少耳
帖皆東札故異勢明者
衆之知其不謬若目北
碑為別派正是從門者
以為何如

包慎翁此論實本阮相國
已未夏清篋

倣書

一 一 爽 爽 月
五 木 亦 十 日 田

清道人

臨書

廿日
你走
可力
無字
王
篆
書

清篋

尚書五教君崇其寬
詩云愷悌君隆其恩

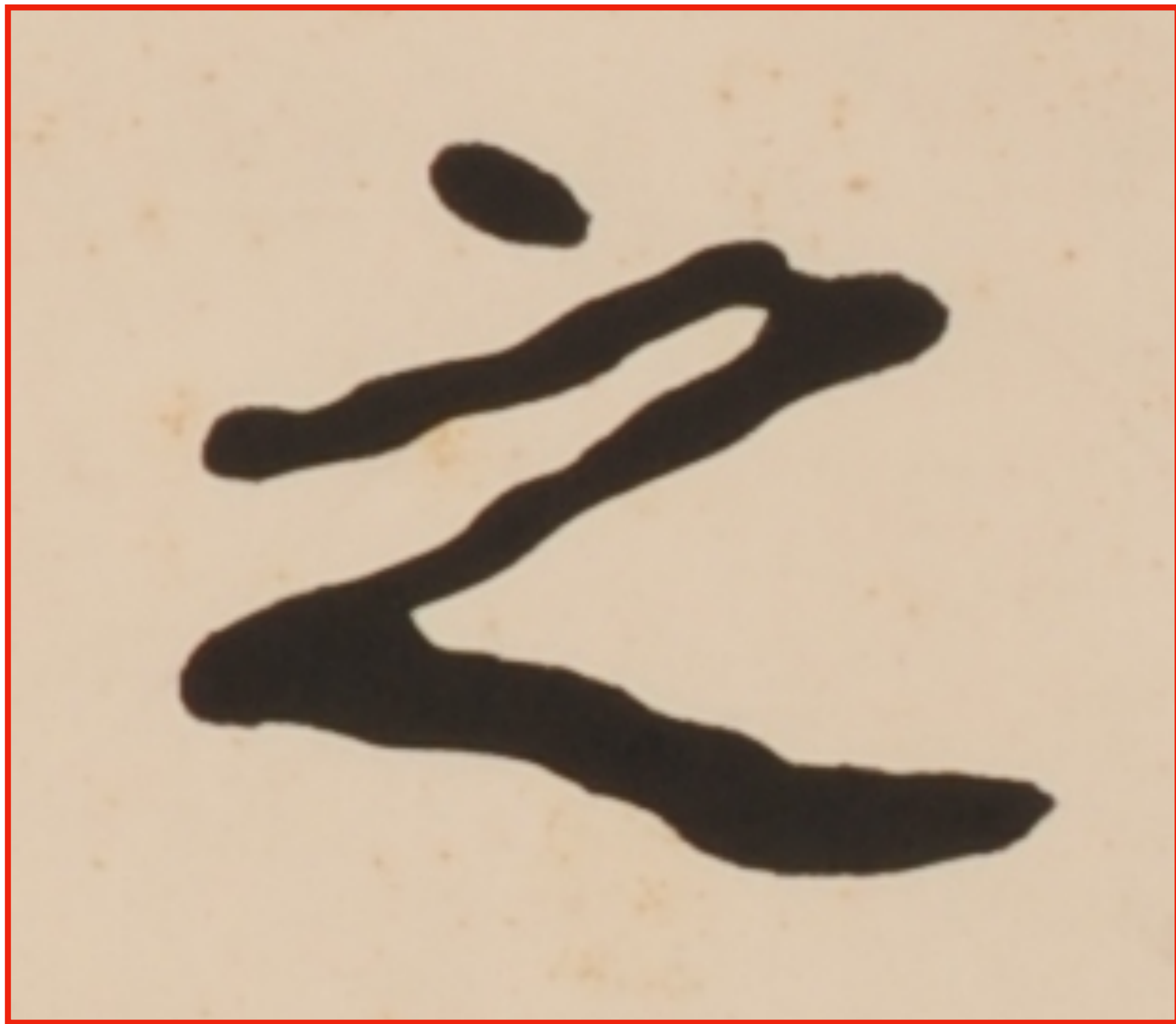
東里潤色君垂其仁
邵伯分陝君懿其棠

晉陽琕琕西門帶弔
君出體素賦雙其勛

遷蕩陰令士民頡頏
隨迷如雲

公方碑板竟中堂變化
與衡方石門埒 何紹基

何紹基（1799～1873）
《隸書臨張遷碑四屏》
清時代後期
同治年間（1860年代）頃
紙本墨書
各166.1×43.5cm
觀峰館藏



李瑞清



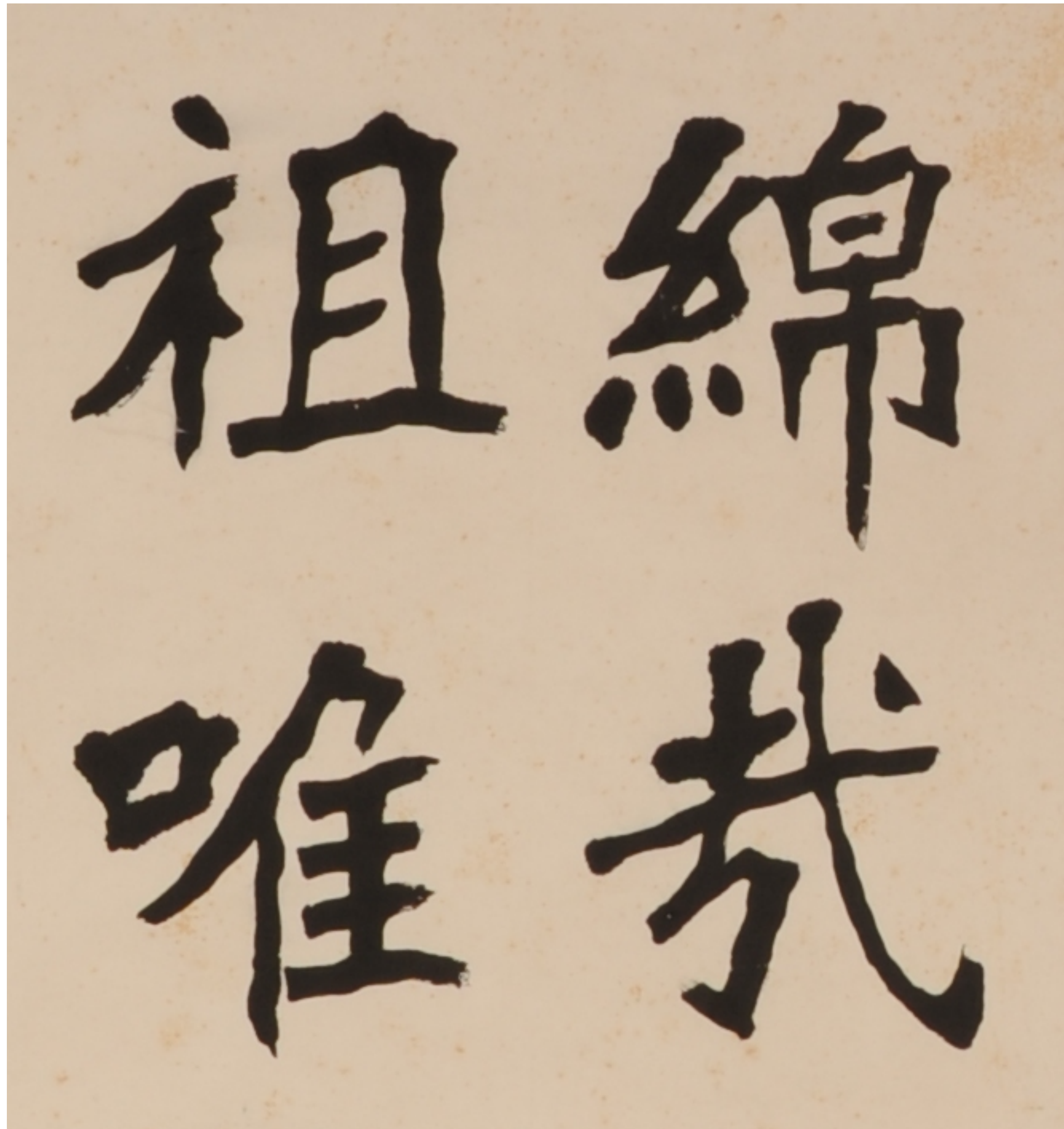
何紹基

大 唐 運 膺
九 五 基 超
七 百 赫 矣
王 猷 蒸 哉
景 命

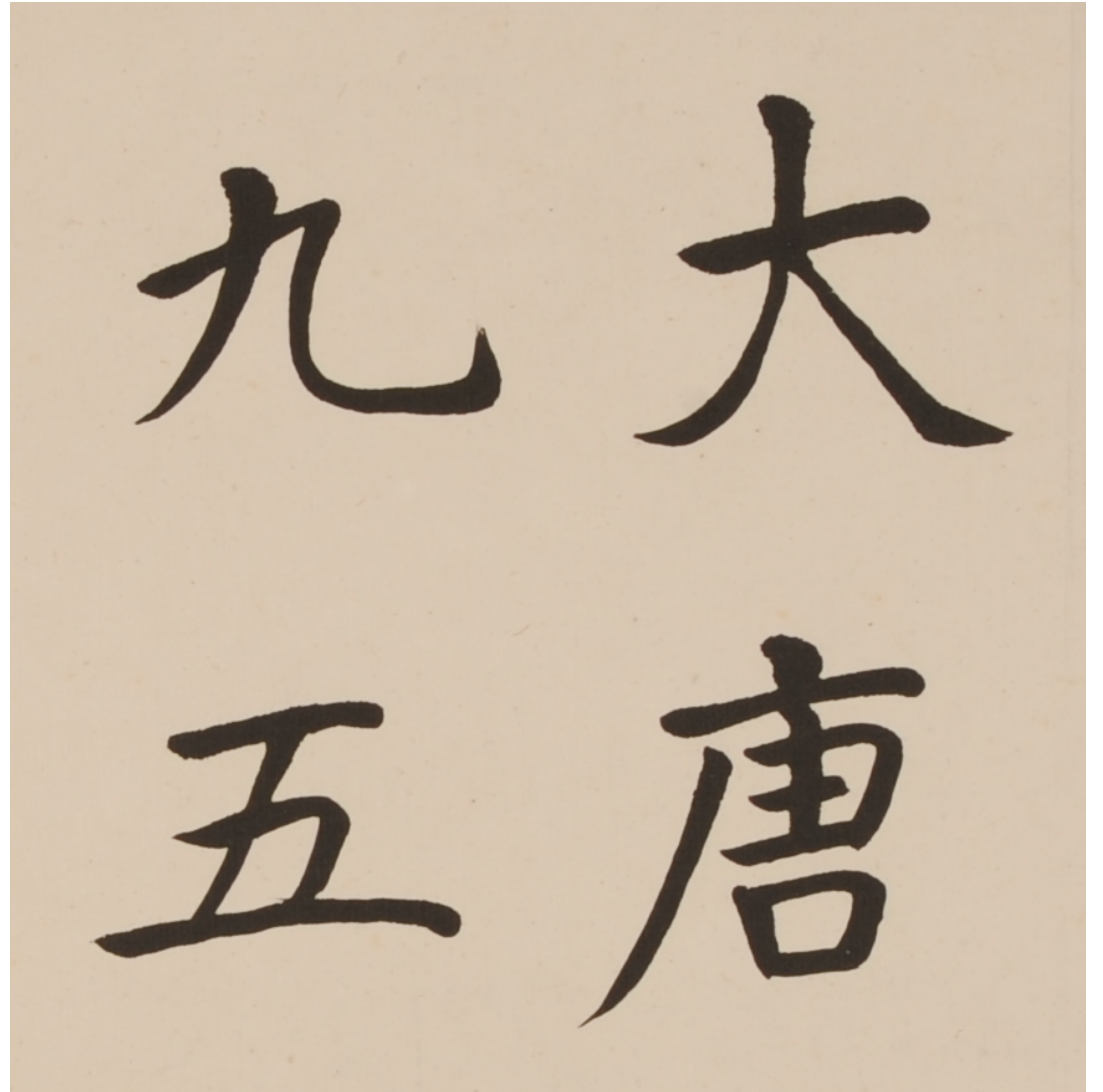
惟唐西見此一人
守南派者



李瑞清（1867～1920）
《臨書冊》（虞世南
《孔子廟堂碑》の臨書部分）
中華民國7年（1919）
紙本墨書、34.6×37.4cm、
觀峰館藏



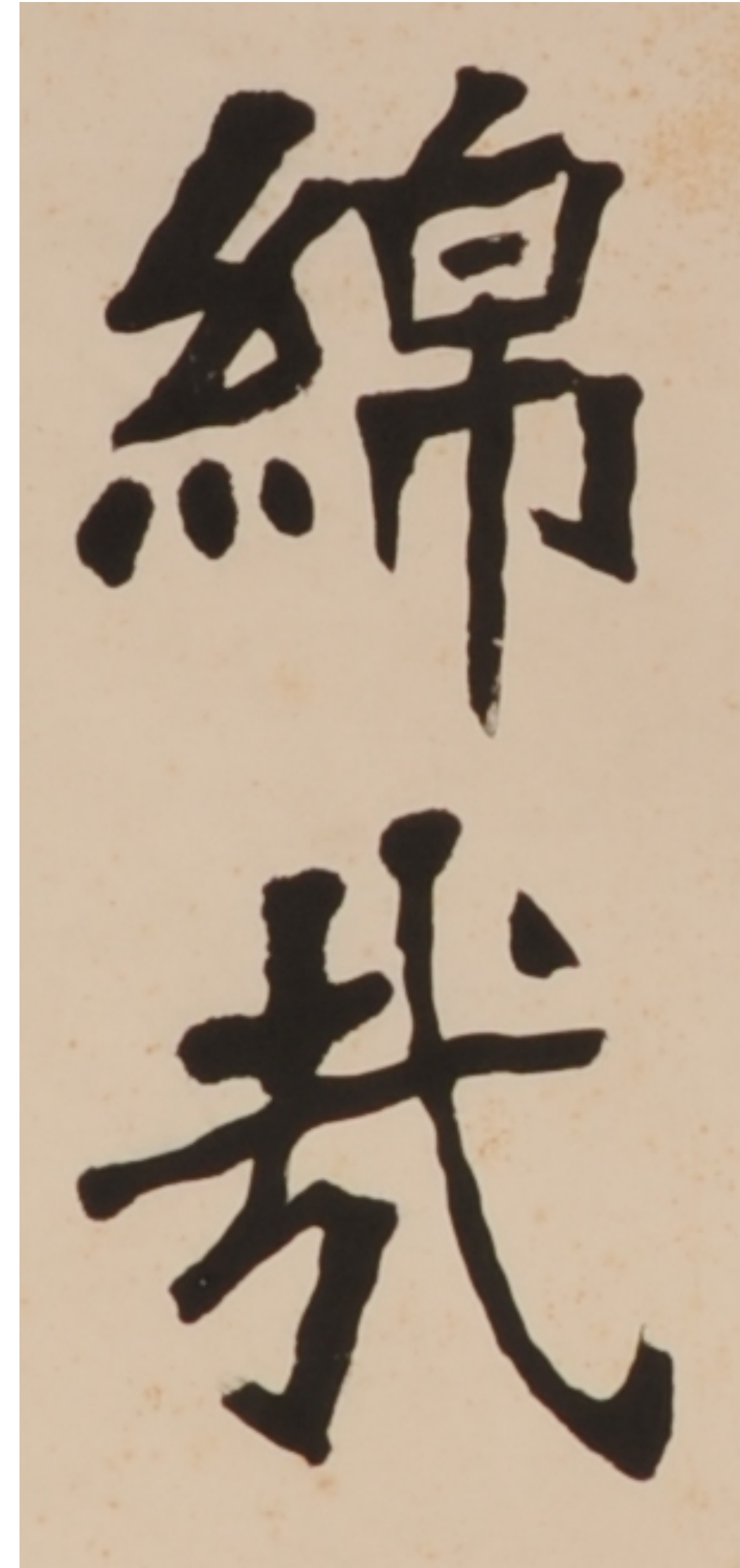
《楷書臨崔敬邕墓誌銘軸》（部分）



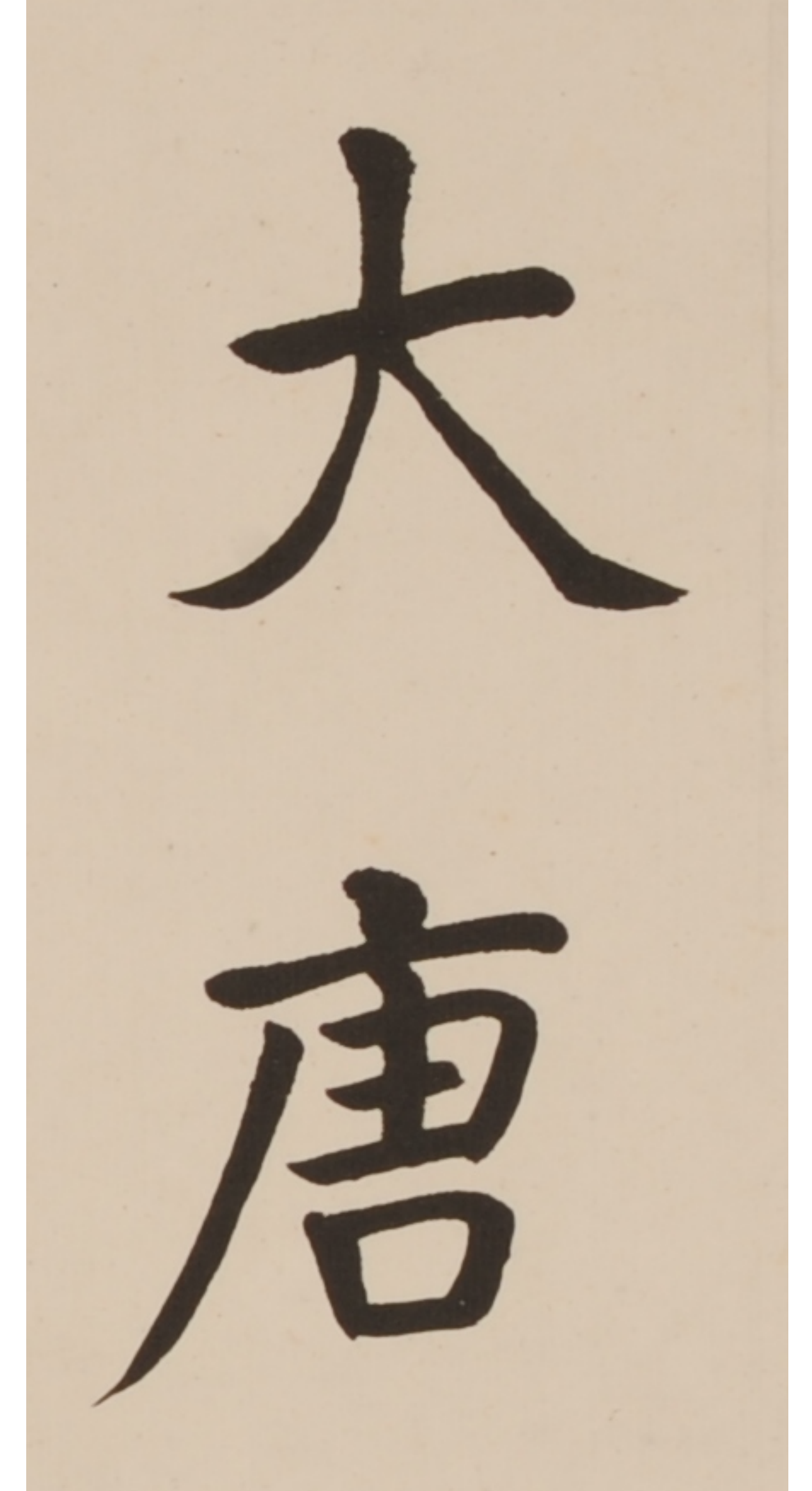
《臨書冊》（虞世南《孔子廟堂碑》の臨書部分）

書風の選択

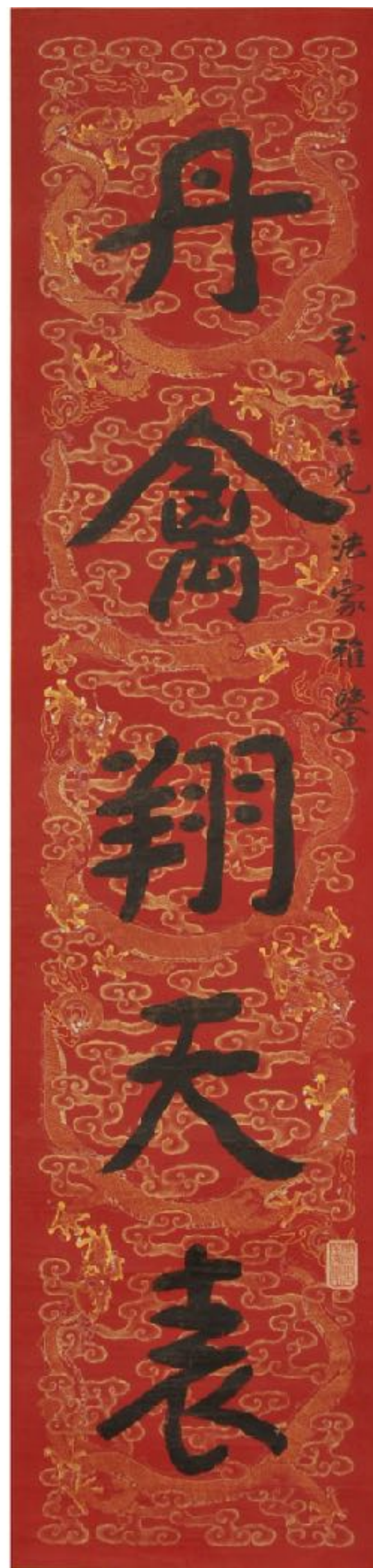
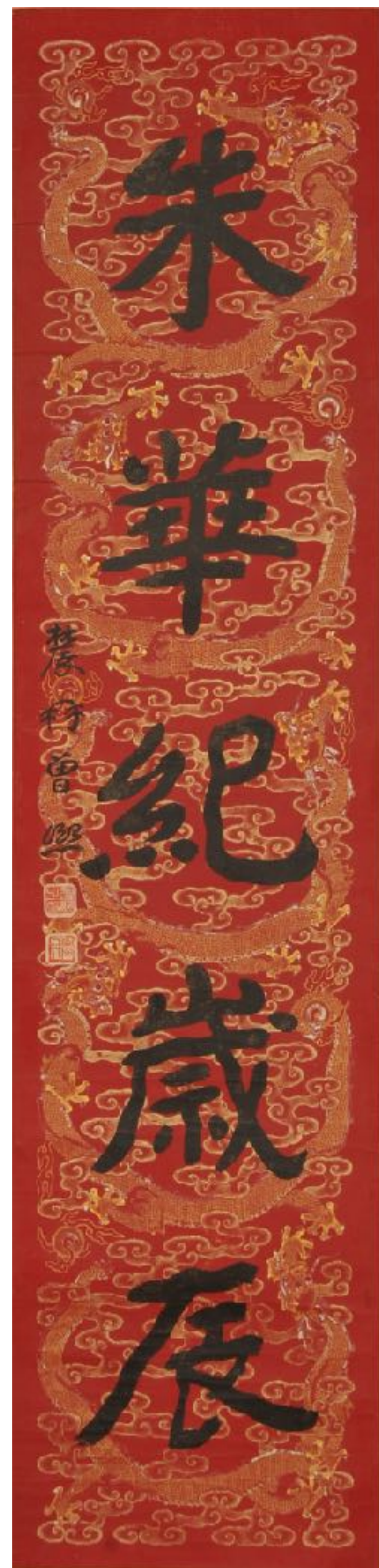
- 李瑞清は鋸体しか書けなかったわけではない。
 - 鋸体という書風を「選択」していた。
 - なぜ？
- 作品を受容する（購入する）上海の人々に販売するため＝流行のスタイル。



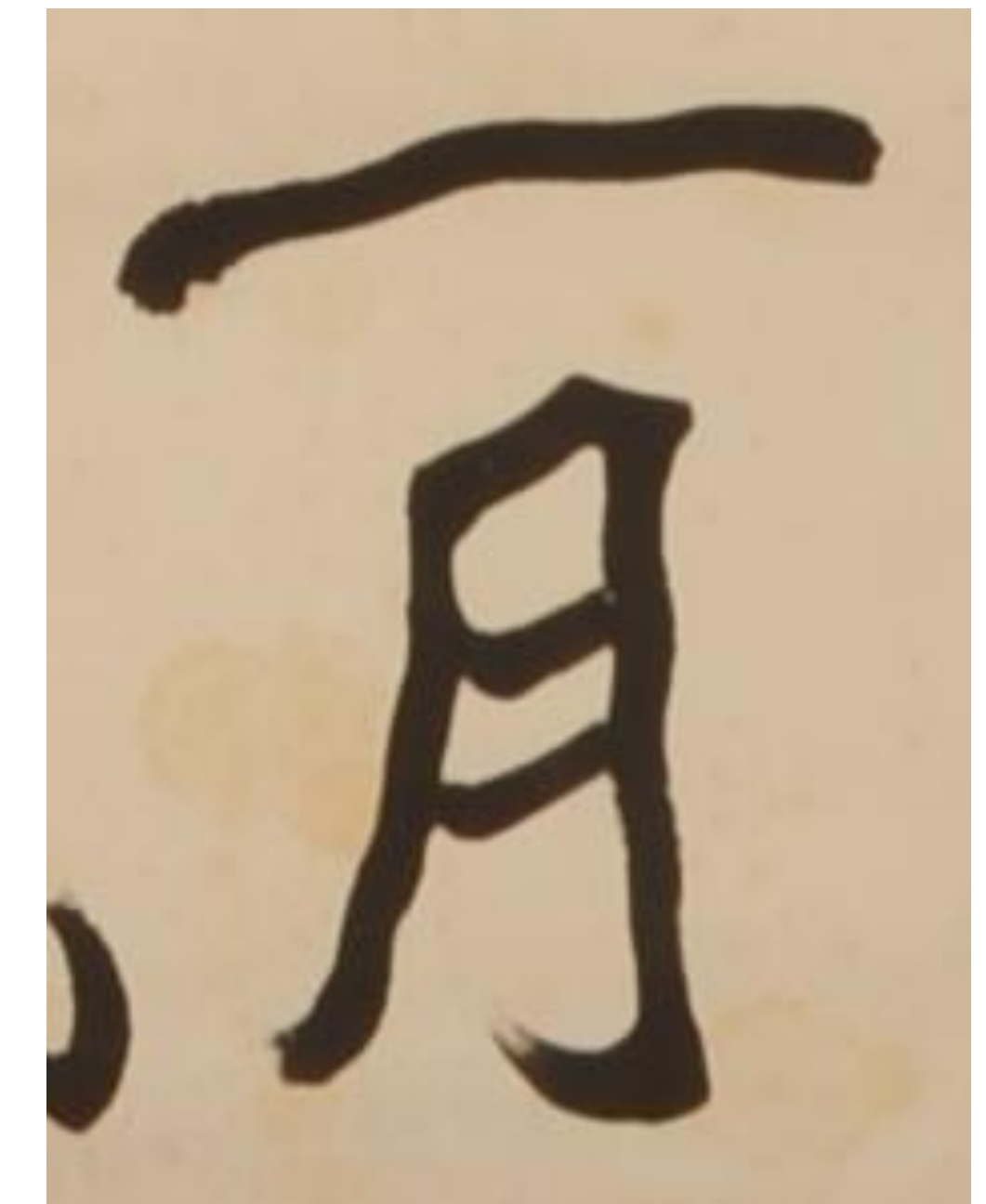
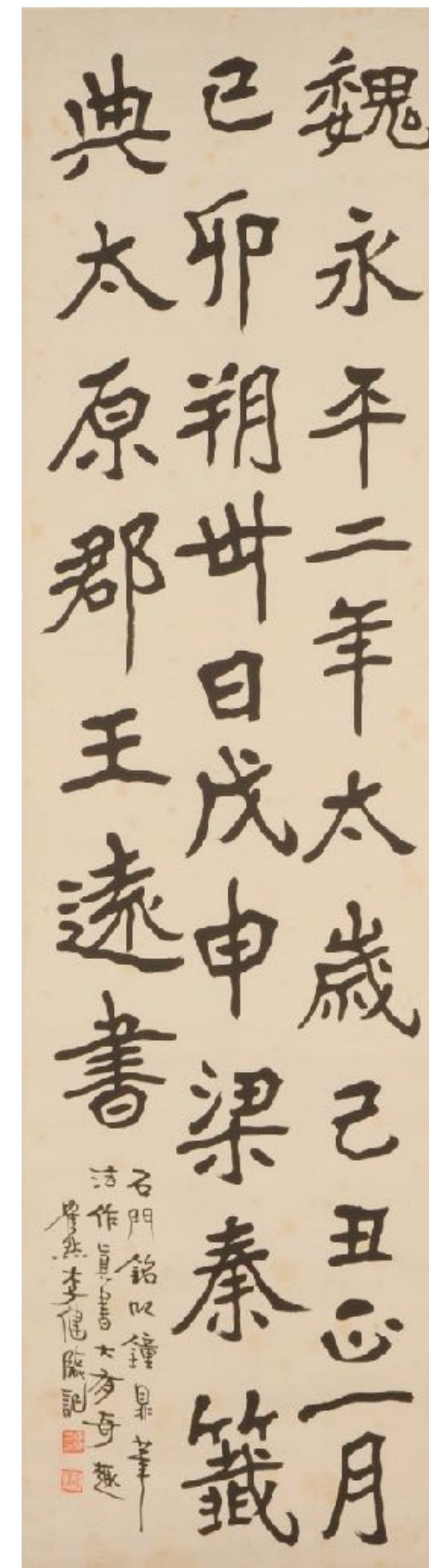
《楷書臨崔敬邕墓誌銘軸》
（部分）



《臨書冊》（虞世南《孔子廟堂碑》
の臨書部分）



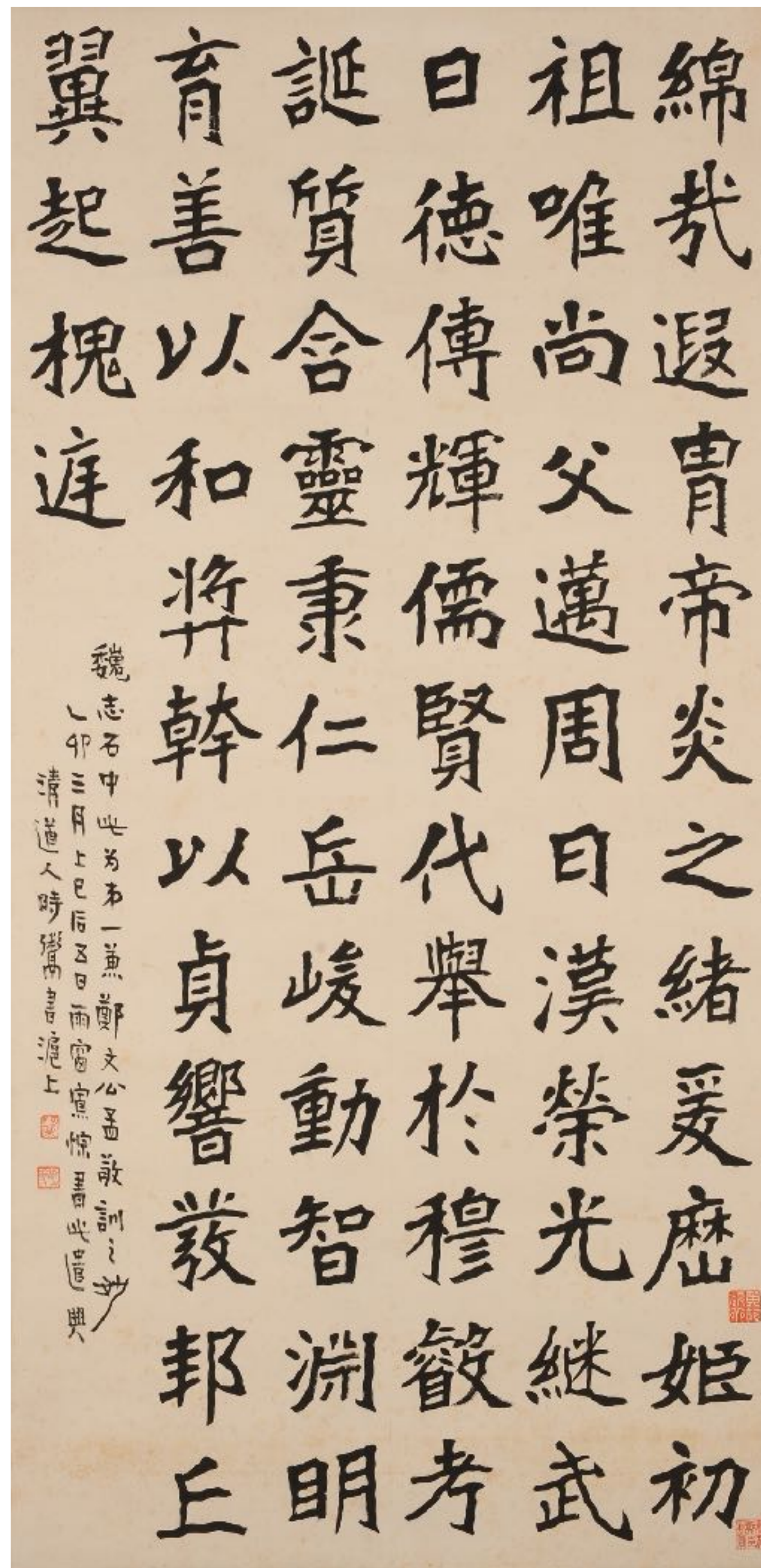
曾熙 (1861~1930)
《楷書五言對聯》
清時代後期~中華民國初期頃
蠟箋墨書、各154.5×37.0cm、
觀峰館藏



李健 (1881~1956)
《隸書臨石門銘軸》
中華民國
紙本墨書、
139.5×38.0cm、
觀峰館藏

おわりに

- ・《崔敬邕墓誌銘》を、「鋸体」という流行のスタイルで臨書する。
- ・手本を「再現」したのではなく、書家による意図的な「表現」。
- ・作品を受容するのは、中華民国初期の上海にいた人々。



※流行＝ある時代／地域で一時的に
広まるもの。

李瑞清（1867～1920）
《楷書臨崔敬邕墓誌銘軸》
中華民国4年（1915）
紙本墨書、135.1×65.9cm、
観峰館蔵

次回の観峰館オンライン講座 予告

観峰館所蔵品を鑑賞しよう（4）

辻本史邑の臨書帖「屏風土代」について

講 師：寺前 公基（観峰館 学芸員）

日 時：2021年7月25日（日）

14：00～（約30分間）

